

し通そうとして、自から実験装置に新たな名称を加えたりする。教育の現場に立った時、やはり同様な仕方では教育を見るのではないかと心配になる。

種々の分野に於いてもそうであるように、物理学は学部で勉強する範囲では各論は何もなく、極めて体系化されていて、全てについて地道に積み上げて行く努力をしないと、次に本当に「物理学が面白くなる」べき段階で何も手に付かず、卒論などは言うに及ばない種類の分野である。(すでに理学部物理学科では卒論なる名称を廃止してしまっている。)試験前に出そうな問題を暗記する程度では残念ながら「単位」ですら取れない。現代に於いては、本当の勉強は大学にしか無いとも思われるが、その勉強の仕方とかおもしろさを知っていない様である。特にこの時期に1つの意識の断絶が見られる原因の1つに教育課程の改革があげられる。種々の教科の先生方も一様に「幼児化している」と言う認識を持っている様であるが、改革後の新しい質を持った学生が今後大学に入って来る。それにつれて大学の質も自ずから変質を迫られている。このまま手を掛けずに放任したら「幼児化」傾向は一步進むだろう、しかし、手の掛け方によっては、ますます「幼児化」に拍車がかけられる可能性も大きい。大学

教育の囿外の問題をも考えなければならぬのはある意味で悲しい事である。

矢吹氏の言う「戻してやる……」為何か必要なのであろうか。物理的発想で見れば、科学的な物の見方、論理の組立て方を物理学を通して学ぶ事になると思う。その意味で物理が面白くなる段階まで最低の所で徹底する努力が必要であると思われる。又学生が強く興味を引く様な問題提起の仕方でも重要だろう。特に一般教育に於いては最低「…0の所まで戻す…」ことの重要性は大きく、その意味で「リベラル・アーツ的教養概念**なる言葉での定式化は当を得ていると考える。専門教育の継承主体にとって、重要な点は、その具体的な習得課程が如何であろうとも、1人の人格にとっては、あくまで「…0の所まで戻し…」た上に専門的知識の体系化の作業がなされるべきであろう。そこに教職に於ける「専門性」が初めて問われるのであって、教養の不具の人格に付加された「専門性」を持ってしては「次代に文化を継承させる」ことを目的とする職業には不適な様に思われる。

* 日本物理学会誌 BUTSURI 32 979, 1977

**国立大学一般教育責任体制に関する調査検討報告書 その3 一総括一

外国語の履習 —昔と今—

植 松 芳 幸

遠い昔のこと。2年間を一般教育と考えたとき、英語・独語・仏語・ラテン語を受け

(らされ)た。興味本位で露語も自ら進んで受講した事もあったが、必習語で手が回

らず断念した。嬉しい事に、女も娯楽も知る暇はなく、辞書めくりが一種のマスターベーションであった。記憶に新しい自慢話をひとつ。——中級仏語、『星の王子さま』、教師の朗読、書き取り、——作者の発想の面白さと仏語の心地よい音の流れに惹かれ、20ページずつ丸暗記していたので何の雑作もなかった。外国語履習の根本はやはり何度も声に出して読む事にあるようだ。

考えてみると、全く未知の言語だった事が第二・第三外国語の履習を楽しくしてくれていた様に思う。必習とはいえずらいと思っただ事もある。しかし、たまたま戦中の東大生の遺稿書『我が命、月明に燃ゆ』を読んでからは、つらいと思う事が如何に怠慢であるかを痛感させられた。(生協に置いてあったから学生諸君も一読されたし。)

従って、何の為に外国語を履習するのかなどと自問し、責を外界に求める以前に、自らを苦しめるサドの喜びと、学生たる者の責務遂行意識によって何とか生きぬいてきた。そしてその事は自らを鍛練する事に他ならなかった。

それ故に予習もせずに授業に出る事などまるで頭になかったし、恥でもあった。日本古来から伝わる美德である「恥かしさ」への思いなど現代では希である。現在の学生

さん方は平然と、否、むしろ当然という態度で「出席する事」にサドの喜びを見い出しておられる。彼らに教える事などもはや不可能である。役に立つか立たないかによってしか興味を示さないし、又、その興味も有効性の前にはもろくも崩れ去る。外国語の授業に出席する事さえ苦痛とおっしゃるのである。まして言わんや自己鍛練などという下劣な思想は見捨られてしまう。更には、科学合理主義万能の時代にあっては偶然性(文学は科学の網の目では捉えられない領域を扱う)など爪ほどの価値も有していない事になる。

一体どうすりゃいいの。学生諸君の「学ぶ」事への自己革新を期待しよう。興味を持たせよう。——無理、無理。外国語の有用性をつとに強調するしかないが、それとて眼前の効果が現われない。八方ふさがりの外国語教育。時代は変るから、無用の有用性を理解してくれる日を夢みて過ごそうか。

大学は思索を深め、理想を追求する場。現実に屈服することを拒む唯一の場。現実に屈服するなど何時でもできる。理想(無用)が現実(有用)を凌ぐはずの大学に、今や数えきれないほどの現実主義者が群をなしている。

事 実

我輩は黒い顔をしているが猫ではない。教務手帳である。私の主人は授業のたびに教室やグラウンドに私を連れてゆき、学生の

名前を一人一人呼びながら出欠を私の顔につけていく。したがって、私を見れば学生の出欠状況が一目でわかるのであり、期末

上 杉 正 幸